『新秋寄楽天』劉禹錫

白居易との友情

新秋寄樂天　劉禹錫

月露發光彩
此時方見秋
夜涼金氣應
天靜火星流
蛩響偏依井
螢飛直過樓
相知盡白首
清景復追遊

新秋楽天に寄す　劉禹錫

月露光彩を発す
此の時方に秋を見る
夜涼しくして金気応じ
天静かにして火星流る
蛩響きて偏に井に依り
蛍飛びて直ちに楼を過ぐ
相知尽く白首なり
清景復た追遊せんや

【語句の意味】

新秋　秋になったばかり
楽天　作者の友人　白居易
月露　月夜に光る露
光彩　美しい色の輝き
金気　秋の気配　五行思想では万物を生成する元素を木・

火・土・金・水と考え秋は金に配された

火星流 夏が終る　火星はサソリ座のアルファ星、アンタレス

蛩 コオロギ

相知 知り合い　知人　友人

白首 白髪の老人

清景 すみきってきよらかな景色

追遊 往時を偲んで遊ぶ

【詩の意味】

月の光を浴びた夜露が美しい色に輝きを発し、この時初めて秋の訪れを見た。

夜になると涼しく秋の気に応え、夜空は静かで（夏の星）アンタレス星が低くなっている。

コオロギは井戸のほとりでしきりに鳴いて、蛍は飛んで高殿を過ぎていく。

あなたも私も白髪の老人になってしまったが、この清らかな秋景色をまた共に往時を偲んで楽しみ遊ぶことができるだろうか。

○開成2年（837）禹錫66歳 洛陽での作。

白居易に代わり同州刺史となっていたが、前年足疾により洛陽に遷る。白居易ら友人は大変喜び、宴席を設け、文酒の会をたびたび開いていた。

この詩に対して、白居易は次の詩で答えた。

酬夢得早秋夜對月見寄　白居易

吾衰寡情趣　君病懶經過
其奈西樓上　新秋明月何
庭蕪淒白露　池色澹金波
況是初長夜　東城砧杵多

夢得が早秋の夜月に對して寄せらるに酬ゆ　白居易

吾衰えて情趣寡く　君病みて經過に懶し
西樓の上　新秋の明月を其奈何せん
庭蕪　白露淒く　池色　金波澹し
況んや是れ初めて長夜　東城砧杵多きをや

【詩の意味】

私は老衰して感興も湧かなくなってきたし、君は病を患って訪ねてくるのもおっくうそうだ。

西楼の上に座せば新秋の明月をめでることができるが、どうしたものか。

庭の荒草には白露が降り、池の水は明月に照らされてうっすらと金色の波を浮かべている。

ましてようやく夜が長くなってきた好季節、城東でしきりに打たれている、きぬたの音を聞きながら、月に向かっ

て夜長をどうしたものか。

○「劉白唱和集」を訳注された柴格朗氏は「この二首に疑問を残したまま、唱酬の作としておく」とされている。

白居易の詩が白氏文集の配列等から考えて開成3年であり、劉禹錫の詩が開成2年なので、時間的にあわないし、内容的にも劉詩の「金氣・火星」「蛩・螢」の詩句に呼応する語が見られない等というのがその理由である。

ここでは「秋の好季節、いっしょに楽しめないか、無理かな」「やっぱり今はちょっと無理かな」と2人がやりとりした詩としておきたい。

劉禹錫と白居易は次のような詩もやりとりしている。

大和6年（832）白居易61歳時、次の詩を寄せている。

寄劉蘇州　白居易

去年八月哭微之　今年八月哭敦詩
何堪老涙交流日　多是秋風揺落時
泣罷幾回深自念　情来一倍苦相思
同年同病同心事　除却蘇州更是誰

劉蘇州に寄す　白居易
去年八月　微之を哭し　今年八月　敦詩を哭す
何ぞ堪えん　老涙交流の日　多くは是れ秋風揺落の時
泣き罷んで幾回か深く自ら念い　情来たりて一倍苦に相思う
同年　同病　同心事　蘇州除却すれば更に是れ誰ぞ

【詩の意味】

去年の8月は、元稹の死を哭し、今年の8月には崔羣の死を哭した。老いの涙がこもごも流れる日が、いつも秋風が吹き、木の葉の散る季節とは、なんとも堪えきれない。

泣きやんで、何度もしみじみと自分を振りかえれば、より一層感慨が深まって、ますます君のことが思われる。年も同じ、病も同じ、心に考えていることも同じ、という人は蘇州刺史の君を除いて、ほかにいようか。

白居易は元稹をなくし、禹錫は元和14年（819）親友の柳宗元をなくし、2人は唯一無二の親友となる。

劉禹錫は白居易に次の詩を返している。

酬樂天見寄　劉禹錫

元君後輩先零落　崔相同年不少留
華屋坐來能幾日　夜臺歸去便千秋
背時猶自居三品　三川呉郡品同
得老終須卜一丘　投老之日、願樂天爲鄰
若使吾徒還早達　亦應簫鼓入松楸

樂天に寄せられしに酬ゆ　劉禹錫

元君は後輩なれど先に零落し
崔相は同年なれど少らくも留まらず
華屋坐り來って　能く幾日ぞ
夜臺歸り去れば　便ち千秋
時に背いて　猶自ら三品に居り
三川と呉郡と品は同し
老を得れば　終に須らく一丘をトすべし
投老の日、願わくば樂天と鄰爲らん
若し吾徒をして還た早達せしむれば
亦　應に簫鼓して松楸に入るべし

【詩の意味】

元君は私らより若かったけれども先に逝ってしまい、崔相公は私らと同年だったけれども、この世に長居することがなかった。

宰相の地位にまで出世し、立派な屋敷に住まうことが出来たとしてもほんの少しの間に過ぎず、一たび墓室に入れば永遠に出てくることはない。君も私も時の巡り合わせが悪く、未だ三品の官に留まっている。（河南の尹と蘇州刺史とは位が同じであるから言った）。

年老いて退官した時には隠居の地を選んで隣同士で暮らしたい。もし私らも若くして出世して地位を得ていたなら、元君や崔君同様に葬列の笛や太鼓に送られて墓穴に入っていたことだろう。

晩年の劉禹錫と白居易の友情

開成元年（８３６）秋、劉禹錫は太子賓客都分司として洛陽に戻った。白居易は太子少傅東都分司としての職についていた。どちらも俸給はついているが実際には内容のない名誉職であり、功臣が余生を送るために与えられるものである。

２人はたびたび文酒の会を開き友情を深めていった。悠々自適の老後に思えるが、隠居後も中央政界の事情に関心を持ち続けた。その理由を明らかにするには、２人が共に経験した「左遷」についてふれなければならない。

《白居易の左遷》

元和９年（８１４）冬、居易43歳、母の喪があけて都にもどり太子左贊善大夫（皇太子のお守り役）に就いた。

翌年宰相武元衡の暗殺事件がおきた際に、犯人を捕らえるよう上奏したことが越権行為としてとがめられ、８月、江州の司馬に左遷された。かつては左拾遺であり翰林学士であったので上奏はその職分であるが、今はちがうというのである。

「その背景には、宦官・貴族出身の旧官僚・科挙出身の新官僚の三つ巴の勢力争いという当時の朝廷内部の事情がからんでいたが、同時に、〔新楽府〕〔秦中吟〕などの多くの諷諭

詩の批判精神に、権力者たちが憎しみを抱いたことも大きな理由となっていた。左遷は楽天にとって深刻な打撃となり、その後の人生観をも左右するほどであった。努めて政争に巻きこまれることを避け、詩も諷諭詩から閑適・感傷の詩へと、その主流が移っていく。」

（石川忠久「白楽天一〇〇選」より）

《劉禹錫の左遷》

貞元21年（805）正月、徳宗崩御。順宗の即位とともに王叔文（しゅくぶん）一党が政権を掌握する。34歳劉禹錫は屯田員外郎に抜擢（ばってき）され、柳宗元らと政権の中枢を担い、「永貞の改革」を進める。宦官・旧貴族の特権で民間の物資をわずかの代償で徴発する「宮市」の廃止や、後宮の官女300人、妓女600人の解放、庶民の滞納していた52万貫にのぼる税金の免除。軍の統帥権を宦官から奪う。腐敗した役人を追放し清官を都に呼びもどす等々で世の中ずいぶん明るくなったといわれる。しかし改革があまりにも性急であったため、宦官・旧貴族の反発が強く、最大の支持者であった順宗は退位させられ憲宗が即位し、改革は失敗する。わずか8ヶ月の短命な政権であった。

王叔文は死罪、劉禹錫（朗州司馬）・柳宗元（永州司馬）等8人は辺境の地の司馬に追放される。（八司馬事件）

この事件により劉禹錫は、志はありながらも中央政治の中心に戻ることはできなかった。

しかし、もう少し若ければ友人の季徳裕が840年（禹錫69歳）翌年季紳も宰相になったので、中央に出仕し政治手腕を発揮できたかもしれない。

「左遷」が詩人を育てる

以上のように2人は不正を糺（ただ）そうとして禹錫34歳、居易43歳の時左遷された。それがその後の2人の人生に重大な影響を与えたのである。そして晩年「志」を持ちつつも居易は政争にまきこまれることを慎重にさけつつ安閑を楽しみ、禹錫は安閑を楽しみつつも71歳の時に書かれた「自伝」を読むと「志」のため死の直前まで「天から与えられた才能を発揮すること」を願っていたように思えてならない。

しかし、禹錫の詩にあるように、もしも「早達」していれば「松楸（墓地）に入るべし」となり、後世に残る詩も白居易との友情もなかったにちがいない。「左遷」が2人の「詩人」と「友情」を育てたのではないだろうか。

〈参考図書〉
「劉白唱和集（全）」柴 格朗訳注　勉誠出版（株）
「白楽天一〇〇選」 石川忠久　日本放送出版協会
「白楽天の愉悦 生きる叡智の輝き」下定雅弘（しもさだまさひろ）勉誠出版（株）